神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	戦国大名北条氏と手づくねのかわらけについて
著者	鳥居和郎
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 40 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2013 年（平成 25 年）10 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【研究ノート】

戦国大名北条氏と手づくねのかわらけについて

鳥居和郎

【要旨】

北条氏二代当主の氏綱の時代、従来、使用されていたロクロ成形のかわらけに加え、手づくねのかわらけの使用が始まった。これは中央の武家儀礼の導入に伴って行われたと解釈されている。また、このかわらけは小田原城跡の数ヶ所など、またいくつかの支城からも少量が検出されることから、本城主が手づくねかわらけの生産や使用を統制し、支城に配分していたとの見解が示され、現在では、手づくねかわらけを「北条氏の権威の象徴」とする評価が定着しつつある。

しかし、これらのかわらけについて使用状況の復元や使用者の検討などは充分に行われているとは思えず、本・支城間の数量的格差に依拠しての見解とみられるため、手づくねかわらけが導入される契機となる幾つかの事項の検討を行った。その中で、駿河今川氏関連の遺跡からの手づくねかわらけの検出状況が、小田原と類似することから、両家においては公卿家との婚姻が導入の契機となった可能性を指摘した。また、支城で手づくねかわらけが検出される背景として、戦陣の際、当主が支城に赴き、そこで行われた儀式で使用された可能を指摘した。これらのことから、このかわらけを「権力の象徴」とみることには慎重になる必要があり、また、このかわらけが継続的に使用された背景には、当主の「好み」という要素も考慮する必要があろう。

【キーワード】

後北条氏　かわらけ　手づくね成形　文化移入　武家儀礼

はじめに

室町時代後期、各地に勃興した戦国大名は独自に領国経営を行い、政治や文化などにおいて中央と一線を画し、独立的に存在していたというイメージがある。しかし、実際には朝廷や幕府の存在を無視することはできず、頻繁に京都外交を行っていたことは様々な史料からうかがうことができる。小田原を本拠とした北条氏の京都外交の様子は『後法成寺関白記』などの京都側の記録類に見られるが、小田原など領国内に所在する関係資料は極めて少なく、その一つとして手づくね成形のかわらけがある。

かわらけとは饗応の席や儀式・祭祀などの改まった場で使用される食器で、清浄さを尊重するため再利用はされず、そのため居館跡や城跡などから大量の廃棄されたかわらけが発見される。また、かわらけが使用される場は限定的で、戦国期の東国では城館・武家地・有力寺社以外の地点では出土しないとされる(1)。

北条氏関連の遺跡からも各所でかわらけは出土するが、二代当主氏綱の時代、東国で一般的なロクロ成形のかわらけに加え、手づくねかわらけの使用が始まった。この手づくねかわらけは小田原城跡を中心として出土するが、一部の支城からも少量が出土する。北条氏関係の遺跡から出土するかわらけについて詳細な検討を加えた服部実喜氏は、この手づくねのかわらけを「戦国大名や領主層のステイタス・シンボルであった美術陶器と並んで、その権力を具現する装置の一つとして重要な役割を担ったもの」と推察された(2)。服部氏の見解は大方に受け入れられ、近年では、北条氏関連遺跡から出土する手づくねかわらけは「北条氏の権威の象徴」また「威信財」などと表現され、本来の用途を超えた機能を持

つ道具としての位置づけがなされている。[3]

後北条氏に関係するかわらけの研究は、発掘資料という性格上、考古学的な手法で分析が行われ、編年や他地域との関連など、その成果の蓄積には大きいものがある。しかし、手づくねのかわらけを北条氏の権力を具現化するものとしてとらえること、本城と支城で出土する手づくねかわらけの数量的格差はそのまま政治的な距離を示すといった解釈に、北条氏周辺の文化に関心を持つ私は少なからず違和感を覚えてしまうのである。発掘状況からみると、そのような解釈は可能となるのかもしれぬが、他の視点も交えて見ると別のイメージも浮かび上がってくるのではなかろうか。小論では、服部氏を初めとする多くの研究成果に導かれながら、北条氏領国下の手づくねかわらけについて考えてみたい。

一　小田原城から出土するかわらけ

まず小田原城跡およびその周辺で出土したかわらけについて、これまでの研究成果を概観してみたい。小田原城跡やその周辺から検出される陶磁器類は七期十一段階に区分され[4]、かわらけについてもその編年に従って分類されている（43頁「表」参照）。戦国時代に該当するのがⅠ期とⅡ期で、Ⅰ期が伊勢宗瑞（北条早雲）の進攻以前に小田原を支配していた大森氏の時代、Ⅱ期が早雲以降の北条氏の時代である。Ⅱ期はさらに4段階（Ⅱa期古段階、Ⅱa期中段階、Ⅱa期新段階、Ⅱb期）に細分される。また、Ⅱ期のかわらけには、在地系のロクロ成形と京都系の手づくね成形というように異なるタイプのものが併存する。

（一）ロクロ成形と手づくね成形のかわらけ

かわらけの成形方法は、ロクロ成形と手づくね成形の二通りがある。ロクロ成形はこねた粘土の固まりを回転台の上に載せ、台を廻し成形後、台を廻しながら糸を使って切り離して作る。手づくね成形はこねた粘土の固まりを肘や、膝頭に押し当てて丸みを作り表面をなでて成形して作る。

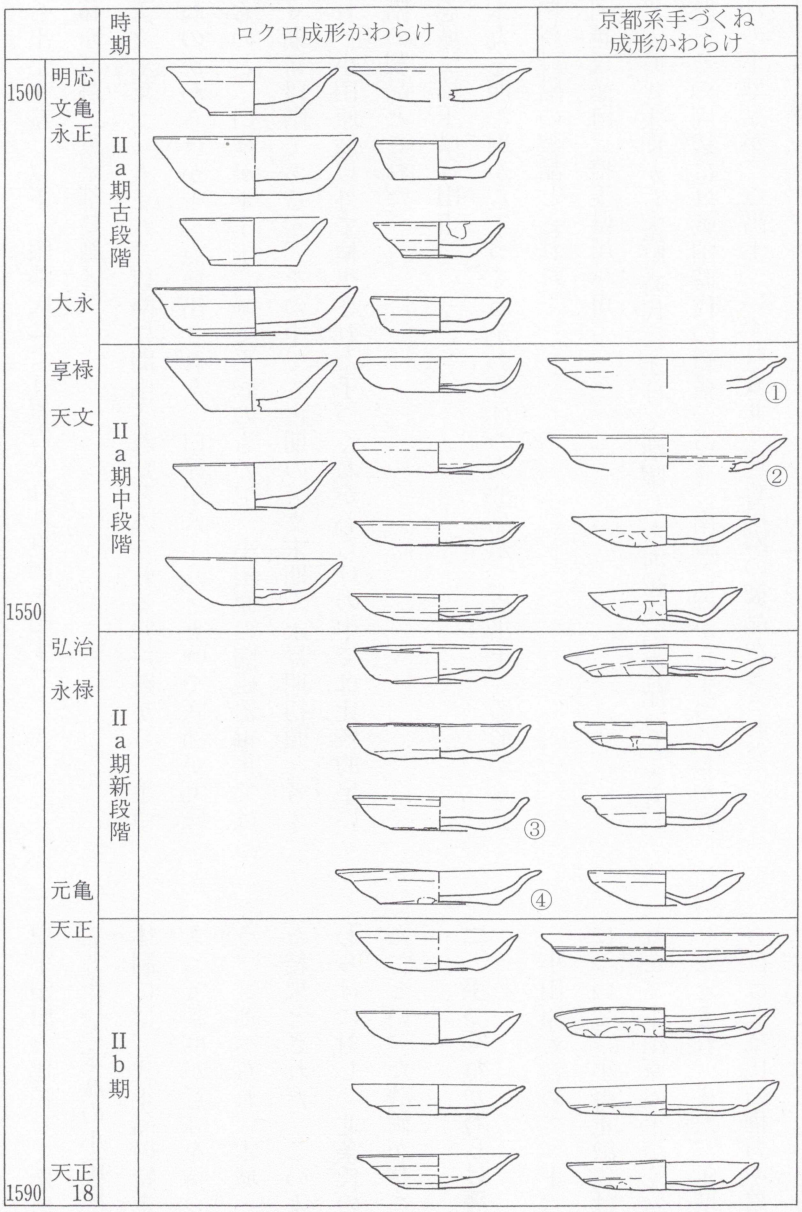
東国で一般的に使用されていたのはロクロ成形のかわらけで（写真1）、中世の小田原ではⅠ期の大森時代、Ⅱ期の北条時代を通じて使用された。また氏綱の時代より京都系の手づくねのかわらけが使用されたが（写真2）、もともとこのかわらけは小田原では生産されていないため、京都から搬入されたかと思えるが、胎土や焼成上の特徴が小田原周辺で生産されたロクロ成形のかわらけと共通するため[5]、京都からかわらけを製作する職人が小田原に下向したと考えられている[6]。この二つのタイプのかわらけの検出される状況はやや異なり、ロクロ成形のかわらけが小田原城跡やその周辺の各所で出土することに対して、手づくねのかわらけは、現状では城内の限られた場所を中心として出土している[7]。また、それら遺構の中にはほぼ手づくねのかわらけで占められる箇所もあることから、手づくねのかわらけにはロクロ成形のかわらけとは異なる使用空間があったことが推測される。

また、北条氏が滅亡した天正十八年（一五九〇）以降、小田原では手づくねかわらけの生産は行われなくなったため、北条氏がこの生産に関与していたとみることができる。

（二）小田原における手づくねかわらけの生産時期

小田原で手づくねのかわらけの生産が始まった時期について、服部氏は「焔硝曲輪上層から出土したかわらけは（「表」①）、京都の『烏丸線No.31土壙7の段階』のかわらけと同様の特徴を持ち、これらの資料は天文元年（一五三二）に法華宗徒らによって焼き討ちされた『山科寺内町遺跡の石室Ⅱ』の出土品とほぼ一致する」と述べられた[8]。また、藩校集成館跡の27号溝（北条時代は三ノ丸にあたる）から出土した手づく

表　後北条氏の時代を中心とした小田原のかわらけの変化



『小田原市史、通史編、原始 古代 中世』827頁「小田原の土師質土器の時間的変化」をもとに作成。

写真 1-1　ロクロ成形のかわらけ

写真 2-1　手づくね成形のかわらけ

写真 1-2　同（側面）

写真 2-2　同（側面）

ねのかわらけの中に「天文□(廿カ)二□(月カ)七日」と陰刻されたもの（「表」②）があることから[9]、天文初年以降、天文二十年（一五五一）以前と推測されている。

（三）支城から出土する手づくね成形のかわらけ

数量的には僅かであるが、手づくね成形のかわらけは北条氏の支城からも出土する。以下、服部氏により報告された事例を記す[10]。

①葛西城跡（東京都葛飾区）

天文七年（一五三八）以降に開削されたとみられる井戸跡から、手づくねのかわらけが十一点検出された。口径が八～八・五cmで底部が丸底のものと、口径が十～十二cmで平底のもので、小田原の陶磁器編年ではⅡa期新段階であるが、その中でも古期の天文末期～永禄期初頭と考えられ、小田原城以外で検出された手づくねかわらけの中では比較的早い段階の製品とされた。

②忍城（埼玉県行田市）

本丸を囲む堀から手づくねかわらけの大型品が二点出土、器形からⅡa期新段階の製品とされた。

③河越氏館跡（埼玉県川越市）

平安時代末期から室町時代にかけて活躍した河越氏の居館跡とされ、館跡とその周辺には戦国時代の遺構がある。南側の堀から手づくねかわらけの小型品が二点出土、いずれもⅡa期新段階の製品かとされた。

④岩付城（埼玉県さいたま市）

主郭内の堀から手づくねかわらけの大型品が二点出土、器形からいずれもⅡa期新段階の製品かとされた。

⑤八王子城（東京都八王子市）

天正八年（一五八〇）から十五年に築城された八王子城の御主殿跡から手づくねかわらけの大型品が六点出土、Ⅱb期の製品かとされた。

⑥玉縄城（神奈川県鎌倉市）

永正九年（一五一二）に築城された玉縄城の主郭南西部の土塁上から二点出土、Ⅱb期の製品かとされた。

このように北条氏の支城からも手づくねかわらけが検出されるが、本城小田原と比較して極めて少量である。この状況について長崎威之氏は「北条氏が本城の小田原と支城との間に特定のカワラケを傾斜配分する体制には、式正品の特定・数量統制・儀礼執行権の分与等の統制手段があって制度が意味を持つ。それには当然にカワラケの製造制限をともなう[11]」と述べられ、本城・支城間の数的な格差には北条氏の意向が反映した結果とされた。このように本・支城間の数量的格差は、手づくねのかわらけに対し「北条氏の権力の象徴」あるいは「威信財として用いられた」といった評価が与えられる根拠となっている。

二　手づくねかわらけ導入の背景について

小田原も含めて、十六世紀に各地で京都系のかわらけが出現した現象について、小野正敏氏は「室町幕府の儀礼が地方へ伝播した結果」とされた[12]。小田原の手づくねのかわらけについても同様の背景のもとに出現したとされ[13]、また、本城小田原と支城での数的格差から、手づくねかわらけは北条氏の権力を象徴するものとの評価が与えられている。

このように、北条氏領国下における手づくねかわらけ導入の契機やその位置づけについては、既に確定されているとも思われる状況にある。しかし評価に先立ち、手づくねかわらけ導入の契機、使用状況、使用者などについての多面的な検討が必要であろうが、この方面の報告はほとんど見られず、概ね検出状況からの判断によっているように思えるのであ

る。

そのような状況のため、本節では氏綱時代における手づくねかわらけの使用を考えるため、導入の契機となる可能性を持ついくつかの事柄をあげてみる。

（一）室町風の武家儀礼導入との関連について

北条氏が手づくねかわらけを導入した契機は、室町幕府の儀礼の導入に伴ってとの見解がある[14]。北条氏を含め多くの戦国大名は、領国経営や自身の叙位任官などのため、幕府や朝廷、また周辺大名との外交は不可欠であった。そのため外交文書の作成、また、自身の上洛や使者の派遣などに備え幕府や朝廷の儀礼を習得する必要があった。北条氏が武家儀礼に関する知識を持った人物を招来したことをうかがわせる史料として、『快元僧都記』の天文三年（一五三四）六月三日条の記事がある。これには「伊勢備中守殿・子息八郎・同名又次郎・大和兵部少輔入道・千秋入道」など、北条氏綱のもとに下ってきた室町幕府奉公衆の名を見ることができる[15]。これらの中には『小田原衆所領役帳』の御家中衆に名前が記されている武士もおり、帰洛せず北条氏に仕官したことがわかる[16]。これら京下りの武士は、北条家の当主に相伴衆として仕え、儀礼や外交などの顧問をつとめていたのであろう。

しかし、これら武士の下向より、さらに溯る大永三年（一五二三）頃には、氏綱は北条への改姓を行っており、享禄三年（一五三〇）頃には従五位下・左京大夫に叙任されるなど、京都外交を活発におこなっていた。

また、氏綱の父、伊勢宗瑞は武家故実で名高い京都伊勢家の庶流であるが、母は伊勢の本宗家出身である。さらに、宗瑞は若年の頃、将軍義尚の申次を務め、武家儀礼については相応の知識を持っていた。嫡子氏綱へもこれらの知識を伝授していたとみられる。小田原における手づくねかわらけの導入は、永正十六年（一五一九）の宗瑞没後、氏綱代となってからも随分時間が経過した段階である。

また、北条氏以外の東国大名も京都外交をおこなっており、当然、室町風の武家儀礼の習得につとめたとみられるが、これらの大名たちは手づくねかわらけを導入しなかった。これらの状況をみると、北条氏のもとに手づくねかわらけが登場した契機を、同家が幕府の儀礼を導入することに伴ってとみることは、やや説得力に欠けるところがあるのではなかろうか。

（二）鶴岡八幡宮の修営との関連について

小田原で手づくねのかわらけが使用された背景について、服部氏は、永正十五年（一五一八）以降、天文年間初年まで続く、氏綱の代替わりにともなう一連の儀式や作事があろうとされた。すなわち伊豆・相模の有力寺社の修営、叙位・任官、などであり、また、近衛家からの後室の迎え入れを通じて京都との結び付きの活発化があった。その中でも天文元年（一五三二）からの鶴岡八幡宮の造営では、近衛家の斡旋による奈良の大工・瓦師を初めとして、京・伊勢など諸国から多数の職人を招来したが、この時、木野、幡枝、栗栖野などの洛北を中心とするかわらけ職人が下向した可能性を指摘された[17]。

北条氏綱による鶴岡八幡宮の修営は天文九年（一五四〇）十一月に上宮の落慶が行われたが、その他の修営は三代氏康の代まで継続した。その間、様々な儀式が行われたが、現状では境内で後北条氏時代の手づくねかわらけが確認されたとの報告はない。現在、手づくねかわらけが検出されるのは小田原城や一部の支城などで、鶴岡八幡宮の修営と直接関連づけられる要素は少ないものと思われる。

（三）北条・今川氏における公卿家との婚姻に関連して

本来、ロクロ成形のかわらけの文化圏といえる駿河今川氏の本拠地、駿府城内三ノ丸南西部の廃棄土坑から、まとまった数の手づくねのかわらけが出土した[18]。この手づくねかわらけは十五世紀末から十六世紀初頭のものと考えられ、ロクロ成形のかわらけが多い土坑とは別の土坑から検出された[19]。ロクロ成形のかわらけが使用されている地域で、突如、手づくねのかわらけの使用が行われたこと、また、手づくねかわらけが集中する土坑があるという検出状況は小田原と類似する。

この時期、今川家当主は氏親で、この人物は北条氏初代宗瑞の甥、氏綱とは従兄弟の関係となり、両家は政治的にも文化的にも密接な関係にあった。駿府に手づくねのかわらけが登場した時期とほぼ同じ永正三年（一五〇六）、氏親は中御門宣胤の娘を夫人として迎えている。

また、小田原に手づくねかわらけが登場したのは天文初年頃とみられるが、この頃、氏綱は夫人の養珠院殿の死去（大永七年没）により、享禄二年（一五二九）から天文二年（一五三三）の間に「北藤」なる女性を後室に迎えた。この女性について冷泉為和は『為和集』に近衛尚通の娘と記している[20]。今川氏、北条氏ともに公卿家との婚姻を行い、それに時期を合わせるように、それまで使用していなかった手づくねのかわらけが登場しているが、このような両家の状況は偶然の一致とは思えないものがある。

河合修氏は今川家における手づくねかわらけ導入のきっかけを、氏親の婚姻後、中御門宣胤や正親町三条実望（正室は氏親姉）など縁者にあたる公卿の下向があったためかとされた[21]。北条家における手づくねかわらけ出現が、近衛家の娘とされる「北藤」との婚姻とほぼ同時期であることを考えると、縁者の下向というより、公卿家の女性との婚姻が契機となったと考えることも不自然ではない。

なお、河合氏が指摘された手づくねかわらけ導入の契機を公卿の下向かとすることについて、同様の例を北条氏に求めてみると、天文三年（一五三四）四月、氏綱はこれまで停滞していた伊豆にある禁裏御料所の貢租を進上した。その前年の同二年六月と十月、勧修寺尹豊は貢租上納に関する用件のためか小田原に下向した[22]。尹豊の相模下向に先立つ享禄三年（一五三〇）、氏綱は従五位下、左京大夫の官位を授けられているため、勅使尹豊への饗応に対し、氏綱は意を尽くしたとみられる。しかし、この尹豊下向が手づくねのかわらけ導入のきっかけとなった可能性について否定はできないものの、史料がなく断定することは出来ないが、必然性を感ずることはできない。

（四）大名の夫人とかわらけについて

永禄三年（一五六〇）と推定される十二月十六日、北条氏綱の末弟である宗哲（幻庵）は、娘の靏松院が武蔵の世田谷城主吉良氏朝へ輿入れするにあたり、様々な作法や心得を記したものを与えた。これが「北条幻庵覚書」といわれるものである[23]。この中にかわらけ使用に関する記述がある。祝言や年中行事、当主氏朝の「御成り」などで行われる式三献について、通常の「常の三献」、本式の「本々の三献」と分け、かわらけを三枚、あるいは一枚で使用する場合など子細に記述している。

また、宗哲は式三献の作法を述べる中で「たゝし、くほなどまいり候ハヽ、ほんほんのしき三こんにて候べく候、さやうに候ハヽ、くほによくたつねられ候て、したいちかハぬように候へく候」と付け加えている。「久保が参ったら本式の式三献として、作法を教えてもらい間違えないようにしなくてはいけない」との意である。久保については、これまでどのような人物であるか言及した論考はなかったと思われるが、『小田原衆

所領役帳』[24]の御馬廻衆の中に「御台所、久保」として記される人物かと思われる。馬廻衆は当主直属の家臣団で、当主の近辺に騎馬で従い警護や伝令などをおこなう武士とのイメージがあるが、北条氏の場合、久保の他に飛脚使・甲冑師・装束担当など職能をもって当主に仕えた人物が含まれている[25]。久保は当主の食事に関することだけではなく、様々な儀式にも関与していたのであろう

このように、龝松院は宗哲から久保より正式な作法を学ぶように指示を受けている。大名の夫人は式三献の作法を会得し、その準備などにも主体的に関わることが求められていたことがうかがえる。

北条氏の領国ではかわらけは商品として流通していないとみられ、その調達は独自に行う必要があった。北条氏、今川氏ともに公卿家との婚姻に近接する時期に京都系のかわらけを使用している。戦国大名間の婚礼などでは複数の家臣が婚家先に扈従する例が多く、また、小田原における手づくねかわらけは京都から工人が下向したとされるが、両家とも嫁いだ夫人がかわらけ製作の技術を持つ者を伴い下向した可能性もあろう。

三　手づくねかわらけの移動について

前節では、北条氏が手づくねかわらけを導入した契機となった可能性を持つ幾つかの事柄を示した。従来、導入の契機とされてきたのは中央の武家儀礼の導入に伴ってというものであったが[26]、それ以外にもいくつかの契機を考えることができる。また、事例を掲げて述べなかったが、京都からの文化移入の大きな要因として、地方戦国大名の底流にある京風文化への憧憬などもこのかわらけ導入の契機となった可能性があろう。

何らかの切っ掛けで導入されたかわらけは北条氏の「権威の象徴」と見なされるようになった。それを裏付けるものは、出土する手づくねかわらけの本城小田原と支城での数量的格差といえ、「格差」は本城主が手づくねのかわらけの生産や使用を統制し、支城に配分したために発生したとされる[27]。しかし「配分」以外にも支城へかわらけが移動した可能性があることに留意する必要がある。次章では少量移動が行われた可能性について述べてみたい。

（一）戦場の作法とかわらけ

かわらけは祭祀や饗応の場での式三献など、戦国大名の日常の暮らしの中だけで使用されたものではなく、戦陣の場でも使用された。玉縄北条家に伝来し、戦場における大将の心得を記したものに「出陣次第」がある[28]。表紙には玉縄北条氏四代当主氏繁の花押、表紙裏には氏繁次男氏勝の識語と花押が記され、氏繁の没年からみて天正六年（一五七八）以前に作成されたとみられる[29]。内容は様々な戦陣の場における作法が記されているが、各所にかわらけを使用する場面も記されている。出陣の膳などは折式に勝栗・昆布・打鮑をそれぞれ盛り、かわらけの盃を添えることが図とともに記されている。また、帰陣の膳、頸実検の場などでのかわらけの使用についても記されている。

これら戦陣の作法は一般的に行われていたとみられ、江戸時代の故実家伊勢貞丈がまとめた『貞丈雑記』などにも同様の事柄が記されている[30]。当主が出陣する時、「北条幻庵覚書」にも記されている御馬廻衆の久保が戦陣での儀式の準備を行い、かわらけは小田原で使用されているものを持参したのであろう。

手づくねかわらけが出土した葛西城は、二度の国府台合戦の時に北条氏の最前線の城となった[31]。城内で出陣・帰陣、あるいは頸実検などの儀式を行ったとみられる。また、河越氏居館跡で検出された手づくねかわ

らけについては、永禄三年（一五六〇）九月、長尾景虎（上杉謙信）の越山に対応するため、三代当主氏康は九月初旬に河越城に入ったことが知られる[32]。手づくねかわらけが検出された全ての支城について、史料の裏付けがあるわけではないが、小田原から北条家の当主などが赴き様々な儀礼を行なうことにともない、小田原から手づくねかわらけが持ち込まれた可能性にも留意する必要がある。

（二）献盃儀礼とかわらけ

戦陣以外にもかわらけが移動する場面はある。天文年間の作成とされ、伊勢貞順が貴人との会食の作法や料理の故実などをまとめた「伊勢六郎左衛門尉貞順記」には[33]、飲酒の作法である「御流」について記している。「御流と申は、かはらけ餘多をかせられ候て、一人前一ッつゝ出さるゝ也、それにて御酒を給わり、そのかはらけ持て罷立候也」とあるように、高位の人物から「御流」としてかわらけに酒を注がれ、そのかわらけを持って退席するとの注釈を加えている。このような形でもかわらけは移動するだろう。

また、越後の国人領主色部氏の記録である「色部氏年中行事」から、色部氏の献杯儀礼を検討された中井淳史氏は[34]、献杯儀礼は正月に集中し、一門、家臣、領内の寺社、領民などが参上し行なわれるもので、献杯儀礼は身分確認の儀礼として席次や献数の違いが重要視されていた。また、同様の行事は各地でも行われ、領域支配の手段として位置づけられていたとされる。管見の限りでは、北条氏関係史料には正月の献盃儀礼に関するものは存在しないと思われるが、同様の行事は行われていたと考えられるため、小田原城内におけるかわらけの使用を考える上で考慮する必要があろう。

なお、岩付城跡で手づくねかわらけが出土した背景として次のことが考えられる。永禄七年（一五六四）の第二次国府台合戦後、太田資房（のち氏資）は北条氏康に服属し岩付城主となった。同十年に上総の三船山（千葉県富津市）の合戦で氏資が討死すると、太田氏は断絶した。天正三年（一五七五）頃、北条氏政の次男が太田家嫡子の仮名源五郎を襲名し、太田の名跡を継承した。また、同十年に源五郎が死去すると、氏政は三男の氏房を岩付城主にした。これら小田原から赴いた二人の入城にともなって献盃儀式が行われたと考えられ、この時、小田原から手づくねかわらけが持ち込まれた可能性も考えられるのではなかろうか。

むすびにかえて

北条氏の周辺で使用された手づくねのかわらけは、京文化移入の例として前々から関心があったが、文献史料がほとんどないためそのままとなっていた。近年、北条氏に関係するかわらけ研究は活発に行われ、手づくねのかわらけに対し、北条氏の権力を象徴するものというような評価が行われるようになった。かわらけが持つ清浄な食器という本来的な機能に加え、権力の象徴という価値観が付与されたわけであるが、この評価には権力者側（北条氏）だけではなく、支配される側もその価値観を共有する意識がないことには成り立たない。しかし、手づくねかわらけの検出状況からはそれらを読み取ることができず、本城と支城という出土地の関係、そしてそれらの間で発生する数量的格差を主な根拠として定義づけられたように思える。

小論では、第一節で後北条氏関係のかわらけの研究状況を述べた。第二節の「手づくねかわらけ導入の背景について」では、手づくねかわらけ導入の契機となる可能性を持つ幾つかの事柄を示した。氏綱は伊豆・相模の支配を貫徹し、また、武蔵支配を展開するため、幕府や朝廷より公

的存在、あるいは地域権力として認知されることが必要であった。近衛家と接近し、自身の叙位・任官、北条への改姓、伊豆仁科の御料所の貢租の進上などを行い、そのような流れの中で手づくねかわらけの導入があった。手づくねかわらけの検出状況からみると、当主の周辺で使用されていたことが推測でき、駿河今川家に関連する遺構からの手づくねかわらけの検出状況も勘案すると、公卿家との婚姻が導入の契機とも思えるが、それを裏付ける史料も存在しないため可能性を指摘するにとどめる。

また、導入の契機とともに、手づくねかわらけが北条家で定着した理由を考えることも重要である。類似する検出状況を持つ今川家では、手づくねのかわらけは定着しなかったが、北条家では天正十八年（一五九〇）の滅亡まで使用された。また、従来から存在し、手づくねかわらけ導入後も併用されていたロクロ成形のかわらけは、その外見を手づくね風に変化させていった（43頁「表」③④）。この流れをみると、当初は都風である「手づくね」ということでこのかわらけに関心を寄せたが、その形状が「好み」となり継続して使用されたのではなかろうか。そこには「権力の象徴」というような意識は存在せず、単なる「嗜好」の領域と考えることができるのではなかろうか。

中央の文化を導入し、それを変容させながら北条氏の文化として定着させた例に「小田原鉢」がある。阿古陀形風の独特の形をした丁寧な作ゆきの一連の兜鉢は、北条家の当主や一族が使用したとみられる。北条家には奈良の甲冑師が仕えているため[35]、それらが製作に関与したと考えられるが、これら中央の甲冑師がもたらした伝統的な形を「北条スタイル」ともいえる独特な作風に変化させていった。この流れは北条家当主の「好み」が反映された結果といえよう。

第三節では「手づくねかわらけの移動について」として、少量の手づくねのかわらけが移動する状況を考えてみた。手づくねかわらけの検出状況は本城と支城の数的格差が大きく、それは「分配」により発生したとみられているが、当主などと共に小田原より手づくねかわらけが移動した可能性も考慮する必要があろう。

今後、北条氏が用いた手づくねかわらけに関する研究の深化のためには、かわらけが検出された遺構の性格付け、使用状況、使用者などについての多面的な検討が必要かと思われる。本稿では史料的な制約もあり各所に推測を重ねる部分が多くなってしまったが、そのような動きのきっかけとなれば幸いである。

追記

手づくねかわらけを中心としたため、本稿では触れなかったが、小田原で生産されたロクロ成形のかわらけが千葉氏の本佐倉城内の佐倉妙見社でまとまって検出されている。かわらけの移動という問題を考える上では併せて検討すべきであるが、紙数の制約もあり行うことができなかった。また、本稿を為すにあたり山口由美子氏から様々なご教示を頂いた。ここに記し感謝申しあげる。

註

（1）長崎威之「第25回大会に寄せて（感想）」『江戸遺跡研究会会報』№131所収、2012年。

（2）服部実喜「戦国都市小田原と北条領国の土師質土器」『中近世土器の基礎研究XIV、京都系土師器皿の伝播と受容―中世後期を中心に―』所収、1999年。

（3）2012年に開催された江戸遺跡研究会の第25回大会「江戸在地系カワラケの成

立」では、後北条氏およびその周辺のかわらけに関した最新の研究成果が発表されたが、その発表要旨や同会の会報などでは、後北条氏の使用した手づくねのかわらけは「権力の象徴」「威信財」といった文言で表現されている。

(4) 大島慎一他「発掘調査の成果にみる小田原城」『小田原市史　別編城郭』所収、1995年。また、この編年を土器の編年に応用した研究として、山口剛志「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告№27』所収、1991年。また、服部実喜「戦国都市小田原と北条領国の土師質土器」『中近世土器の基礎研究XIV、京都系土師器皿の伝播と受容―中世後期を中心に―』所収、1999年がある。

(5) 『小田原市史、通史編、原始古代中世』829頁。

(6) 前掲（5）836頁。

(7) 「焔硝曲輪」上層、「藩校集成館跡」27号溝、「三の丸　箱根口跡」1号堀下層、「城米曲輪（御用米曲輪）」1次1号溝、「三の丸　山本内蔵邸跡Ⅳ」かわらけ廃棄層、「城下法雲寺跡」2号溝から検出される。また、これらの中で「三の丸　山本内蔵邸跡Ⅳ」かわらけ廃棄層、「藩校集成館跡」27号溝はほぼ手づくねかわらけで占められる。その他、少量の手づくねかわらけが検出された遺構として「欄干橋町遺跡第Ⅳ地点」333号遺構・94号遺構、「中宿町遺跡第Ⅱ地点」第6号炉・第14号土坑などがある。

(8) 前掲（5）833頁。

(9) 『小田原城三の丸　藩校集成館跡の調査』小田原市教育委員会、2000年。

(10) 前掲（2）。なお、前年に刊行された前掲（5）でも服部氏は支城から検出されたかわらけを紹介されたが、編年などが若干異なるため、ここではより新しい成果が反映されているとみられる前者のものを記した。

(11) 前掲（1）と同じ。

(12) 小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社選書メチェ、一九九七年。

(13) 前掲（5）835頁。

(14) 前掲（5）（12）と同じ。

(15) 「快元僧都記」『群書類従』第二十五輯　雑部　巻四五六。

(16) 佐脇英智『小田原衆所領役帳』東京堂出版。『役帳』に、備中殿（伊勢貞辰か）、伊勢兵庫頭殿、同八郎殿（伊勢貞就息か）、大和殿（大和晴統）、小笠原六郎殿（小笠原元続）、同弥六殿（小笠原元続弟か）などの名前を見ることができる。

(17) 前掲（5）836頁、また、前掲（2）48頁、1999年。

(18) 「静岡県埋蔵文化財研究所調査報告書　第203集『駿府城内遺跡』」2009年。

(19) 河合修「駿府界隈のかわらけ」『江戸遺跡研究会　第25回大会　江戸在地系カワラケの成立〔発表要旨〕』219頁、2012年。

(20) 天文二年三月十一日、小田原に下向した為和は北条氏綱館のおける歌会で「いへはえにみなれぬ花の朝こちになひくもしるき北の藤なみ」の歌を詠い、その注に「氏綱女中は、近衛関白殿御姉にてましますか、ご内縁になられける間」と記している。この記事を根拠として、氏綱の後室は近衛尚通の娘とされている（『為和・政為詠草集』冷泉家時雨亭叢書第76巻、朝日新聞社、2007年）。高群逸枝氏は近衛尚通を中心とする近衛家の家族関係について、男子は近衛家と久我家を相続した者を除いて全て出家し、女子は将軍足利義晴と北条氏綱の夫人となった者を除いてやはり出家するか不婚であるとする。女子が不婚である理由として摂関家の女子が入るべき家格の家が無かったためとされる（高群逸枝著、栗原弘校訂『平安鎌倉室町家族の研究』国書刊行会、1985年）。将軍家は兎も角として、北条家と近衛家の家格が合うとは思えず、氏綱との婚姻は異例と思われる。「北藤」は近衛尚通がしかるべき女性を養女とした後、氏綱のもとに嫁がせたのではなかろうか。

(21) 前掲（19）220頁。

(22) 『御湯殿上日記』天文二年六月五日条、十月二十九日条、天文三年四月二十八日条。

(23) 『小田原市史、史料編、原始古代中世Ⅰ』三八〇号文書。

(24) 前掲（16）と同じ。

(25) 鳥居和郎「後北条氏の京都外交と左近士氏」『戦国史研究49号』2005年。

(26) 前掲（13）と同じ。

(27) 前掲（1）と同じ。

(28)「出陣次第」（田中穣氏旧蔵典籍古文書のうち）歴史民俗博物館所蔵。

(29) 北条氏繁は天正六年（一五七八年）に病没している。

(30) 伊勢貞丈『貞丈雑記』酒盃之部、東洋文庫４４６。敵の大将や侍大将の頸実検の時には、酒を入れたかわらけを二つ出して、酒をこぼし呑ませるまねをするなどと記される。

(31) 天文七年（一五三八）の第一次合戦では氏綱は嫡男氏康、弟の長綱らとともに出陣し小弓公方足利義明、嫡男の義純、弟基頼らを討ち取った。また、永禄七年（一五六四）の第二次国府台合戦では氏政が出陣し里見義堯と戦い勝利している。また、氏康の房総出陣の様子をみると、初見は天文十三年九月に土雁原、十月に内安房、天文十六年閏七月には下総に出陣、天文二十二年四月から七月にかけて房総に出陣している（前掲（５）５１８、９頁）。

(32)『小田原市史、史料編、原始古代中世Ⅱ』四四九号文書。

(33) 伊勢貞順「伊勢六郎左衛門尉貞順記」『續群書類従』第二十四輯下　武家部。

(34) 中井淳史「16世紀地域社会における献杯儀礼『長楽寺永禄日記』『色部氏年中行事』を中心に『日本語・日本文化』27巻所収、２００１年。

(35) 前掲（25）。現在、小田原鉢と称される兜鉢の中には、近世の作品や後銘のものが多く、様々な形状のものが紹介されている。典型的な小田原鉢の作例として当館特別展図録『後北条氏と東国文化』『戦国大名北条氏とその文書』所収の図版を参照して頂きたい。